

【シリーズ】
中村伊知哉の

モノ申す

第二話
卵売りのミネソタ

Illustrated by きたよりこ

中村伊知哉／なかむらいちや
スタンフォード日本センター研
究所長

(財)国際IT財団専務理事

郵政省(現総務省)で14年間
にわたりIT政策に携わった後、
98年から2004年8月までMIT
メディアラボで客員教授を務め
ました。2002年9月、本センタ
ー研究部門所長に就任しまし
た。

郵政省では、電気通信局で通
信自由化に従事した後、放送行
政局でCATVや衛星ビジネスを
担当。登別郵便局長を経て、通
信政策局でマルチメディア政
策、インターネット政策を推進。
93年からパリに駐在し、95年
に帰国後は官房総務課で規制緩
和、省庁再編(総務省への移行)
に携わりました。

98年に退官し渡米。MITメデ
ィアラボ客員教授に就任したほ
か、(株)CSK顧問、(社)音楽
制作者連盟顧問、NPO「CAN-
VAS」副理事長、芸術科学会評
議員、ビジネスモデル学会理事
などを兼務し、産・官・学の間
を動き回っています。

京都大学経済学部在学中は
ロックバンド「少年ナイフ」の
ディレクターを務めていたこと
でも知られます。著書に「イン
ターネット、自由を我等に」(ア
スキー出版局)などがあり、新
聞・雑誌等のコラムやインタビ
ューでも積極的に発言していま
す。京都市出身。

渋谷とおぼしき街頭。女子中学生がバナナにマヨネーズをつけて食べている。「おいしいおいしい。」おいそれはちょっとどうか。次のシーンで、彼女たちは、カレーに納豆とマヨネーズをグチョグチョに混ぜて、食べた。「おいしいおいしい!!」なんか、これはちょっと自分と違うぞ。そうしたら、次、カップめんにも熱いコーヒーマヨネーズぶっかけときた。「おいしいおいしい。」

ヤラセ番組ではなさそうだ。ちょっと考え直さなければいけないと思った。味覚というものは三代かかるという。するつてえと私の脳ミソの中に三代かかって培われてきた味覚のDNAをですね、彼女たちは根本から覆そうとしているのではないか。つまり、パンクなのではないか。

渋谷の街頭の親指族。片手でメールを連発する。ハード・ラインゴールド著「スマートモブズ!」は、そんなニッポンのティーンエイジャーに出会った驚きから始まる。でもそれはもう5年前の姿だ。古ぼけて映る。ウヨウヨしていたガングロたちは姿を消し、小学生が目立つようになった。親指で送るものは、文字のメールに、写真メール・ビデオメールが加わった。

文字のメールも打つ。だがその字は、鍛錬なくして読めない。彼女たちの文字は手作りだからだ。ギャル文字というやつだ。若いやつは活字離れで、などというが文字離れではない。振り返れば平安の女性は、かな文字を開拓した。日本のアナログ文化を築いた。当時の世界文明をリードした。千年たつて、平成の女性は、ギャル文字を開発する。日本のデジタル文化を築く。そして現代の世界文明をリードしている。



綿矢りさ、金原ひとみ両氏のように、若い女性が文学賞を取るケースが目立つ。真鍋かをりがゲロ吐いたとブログで告白すればトラックバックが565本もついたりする。電車男のように、会ったこともない人たちがネット上で新しい文学表現を作り上げたりする。デジタル世代の表現が文学とネット文壇を突き抜ける。文字離れどころか、書くことが苦痛でない世代の登場と見るむきもある。

ビデオとケータイが組み合わさり、テレビ局の中継車並みの機能を手中にする。一億人の歩くテレビ局ができあがる。ニッポンの若者が世界に先駆けて実践することになる。ケータイ文化を立ち上げて消えたガングロたちは、黒く塗って変身したかったのだろうか。何かを顕示したかったのだろうか。それを受け継いだ小学生たちは何を作ろうとしているのだろうか。

美しい。小学生だというのに、右手にケータイ、左手に化粧バッグをぶらさげる。ヘアスプレー、リップクリーム、アイシャドー、マニキュア、ボディージェル。どれも青や緑やピンクのラメ入りだ。くちびるも、ほほも、つめも、髪も、警戒色でピカピカに染め上げて、センター街を駆け抜ける。刺されたらきつと毒が回る。

そんな世代の子どもたちと、「東大サマーキャンプ」と銘打つイベントを開いた。12日間にわたるアニメ・映画教室だ。東京大学の先端科学技術研究センターに数十名の子どもが集い、ねんどを使ったアニメーションやショートフィルムを作った。

ストーリーを作る。キャラクターを描く。ねんどをこねる。コマ撮りする。パソコンで編集する。音声を入れる。そして作品をブロードバンドで世界に見せる。ポップでキュートな短編が生まれていく。鼻歌まじりに絵コンテを切り、初めて触れる編集ソフトをマニュアル抜きで使いこなす。そして大人が舌を巻く出来栄の作品。日ごろテレビやゲームで鍛えていることがうかがえる。CGアーティストの季里さんがファシリテーターを務めた。本物のアーティストに触れる体験は子どもたちにとって一生の財産となる。

映画教室では、まずはロケハン。6人一組の集団にビデオカメラ1台を渡し、撮影場所を探してこいと指示する。集団行動を念頭に置いて教室から送り出す。しかし連中は、ちりちりに出かけて行く。そして、それぞれの右手が握るケータイから、各自お気に入りのスポットを写真で送り合い、交信し合



い、十分な素材を集めて共有し、教室に戻るころには話がついている。そうか、それが正解だな。まったくスマートなモブズには、教えるどころか、教えられてばかりだ。

デジタル・ネット時代のコンテンツは、この世代が生みだしていく。コンテンツは「楽しむもの」から「創るもの」へと変わっていく。そのモチベーションやメカニズムは、アナログ世代とは大きく異なるかもしれない。

各地で、各国で、こうした活動を進めたい。いずれビデオクリップを分散アーカイブ化して、各国で共有して、ウェブ上でクリップを組み合わせ編集して新しい作品を作るバーチャル・ワークショップができるようにしたい。

このワークショップを主催したのは、「CANVAS」という名のNPOだ。子どもの創造力や表現力を高めるための活動を推進している。政府やマルチメディア振興センターの支援のもと、ブロードバンド時代のコンテンツを生む土壌を整えることを目的としている。

内外の科学館や教育工学系の研究者、アーティストや自治体、企業らが集うプラットフォームとして2002年末から活動している。川原正人 元NHK会長が理事長に就き、東京大学情報学環の山内祐平助教授と私が副理事長を務めている (<http://www.canvas.ws>)。

2004年の1月、CANVASは、東京で「ワークショップコレクション」を開催した。子どもたちが新旧メディア技術を駆使して、自分の表現方法を見つけ出そうという試みだ。日本の子ども向けIT系ワークショップが一堂に会する初の催しである。

集まったワークショップは14種類。アーティスト LOCOさんによる糸電話づくり。オルケスタ・デル・ソルのパーカッション、ベッカーさんによる「ドラ

ムサークル」。これら原始的なコミュニケーション手段を作るもののほか、数々の先端技術を使ったイベントが参加した。PCおえかきリレー。ラジオDJ。映像ソフト教室。音楽DJ。ロボット作り。ねんどアニメ。CGキャラクター作りなど。

2005年にも15種類のワークショップを集めて実施し、学校や企業関係者、官庁ら総勢1500名が来場、会場は熱気に包まれた。PCやネットの普及が一段落をみせ、コンテンツを創ったり表現を育んだりすることが大事だという認識が急速に広がりを見せている。



2005年4月には、ケータイ4コマ写真ワークショップを東京とパリで開催した。日仏の子どもたちが写真メールで4コママンガを作って、交換して、混ぜて、表現や文化の違いを考える。NTTドコモが主催、CANVAS共催、パリではユネスコが協力してくれた。

そのユネスコが主催するアート教育会議のため、昨年、香港を訪れた。そこで出会った地元女性、20代独身・高層アパート住まいに、好きなタレントはと聞くと、キムタク!と答える。ははあ日本に関心があるんだね。「日本のひとはみな一軒家に住んでるからうらやましいです」という。え?ぼくは一軒家に住んだことなんかないよアパートばかりだよ。「日本のひとはみな一軒家に住んでいるのですうらやましいです」という。

誰が一軒家に住んでいるというの?「ドラえもん。」あ。「ちびまるこちゃん。」ほう。「クレヨンしんちゃん。」うん。「アraleちゃん。」なるほど。アニメで香港で紹介されるニッポン代表はみな一軒家なんだな。日本ポップは、実態とは違うイメージを海外に喧伝しているのかもしれない。

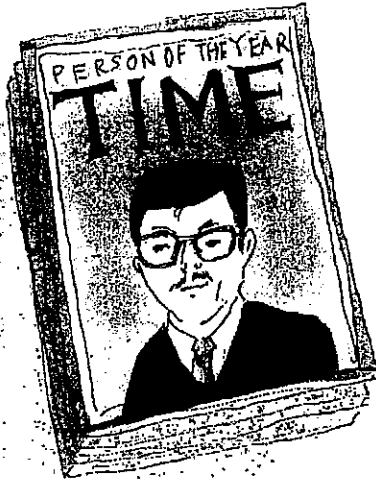
ケータイ国際フォーラムというイベントの司会で天津に出向いた際、天津飯を食べたいと現地の方に頼んだ。だがみなきよんとしている。調べてみると、天津飯というのは日本で生まれた料理で、むかし卵を中国から輸入していたころの積出港である天津の名前を冠したのだそうだ。日本が天津に勝手なイメージを抱いているだけか。

むかし、ミネソタの卵売りという歌があった。ミネソタ出身のラジオ局の社長に会ったとき、ミネソタの卵売りはどんな様子が私がしつこく質問し、ミネソタには卵売りなどないとする社長と言い争いになった。冷静になって考えれば、それも日本の勝手なミネソタ観であった。

情報がどう実像を描くのかは、情報の受け手側に委ねるしかない。そして、グローバルな情報の送り手と受け手のズレを小さくするには、それぞれがコミュニケーションを活性化することが肝要だ。

よし、ならばニッポンならではのワークショップをもっと開発しよう。たとえば、どつきマンザイはどうだ。キミとはやつとれんわ。えーかげんにしなさい。どつきながら仲良くコミュニケーション。ニッポンならではの様式ではなからうか。それをこどもたちに作らせ、世界に見せる。おそらく海外から反発が返ってくるだろう。ならば議論のチャンス。君たちはどんなコミュニケーション様式を持っているの?固有の表現、固有のリズム、固有の息づかいを交換してみよう。

日本の若者は決してつましくはない。9.11の年末、米タイム誌がマン・オブ・ザ・イヤーを公券したところ、オサマ・ビンラディン氏は2位だった。堂々の1位に輝いたのは、田代まさし氏。のぞき事件が騒ぎになった年だ。「2ちゃんねる」のコミュニティーがジョークで投票した結果だという。



タイム誌はこの荣誉あるイベントのページを削除するハメになった。世界的なエスタブリッシュメントたるマスコミが、極東の、匿名の、しかし連結したガキどもにいてこまされた。ネット社会の行方を占う事件である。日本の若い連中が国際ネット社会に情報を発信していく意思表示とも読める。2ちゃんねるでお祭り騒ぎをして、P2Pでコンテンツをダウンロードして、ブログで発信する。そんな世代が力を持ち始めた。

ところでカップめん中学生におののいた私だが、最も世話になったカップめんといえば「ペヤング・ソース焼きそば」である。四角いかおー、まるやかー、のCMでおなじみだ。おなじみではないか。古いCMだし、関東限定だし。お湯を入れ、捨ててからソースをまぜるのだが、お湯を捨てる前にソースをまぜるといった実に痛い！経験をへて人間は成長する。

8年ほど前のこと、役所で行革を担当していたころ、夜食に四角い顔ばかり食べていて、ふと「ペヤング」というのが何を意味するのか気になって、気になって、仕事が手につかなくなった私。Yahoo!で検索してみた。「0件がデータベースに存在しました」と出た。当時ネット界から無視されていたペヤング。先日また検索してみた。35,415件。おおっ。ペヤング情報が爆発している。ペヤング愛好会までできているではないか。この8年の間に、多くの人々の手により、ペヤング・ネットアーカイブが形作られたのであるなあ。

「ペヤングというのは、ペア・ヤングの略で、ヤングがペアで食べることを想定して開発された商品なのです。」8年前、ネットで調べがつかずショックとしていた私をみかねた優秀な部下が、四角い顔のパッケージに記された「製造元・まるか食品株式会社」に電話したところ、受付嬢が教えてくれたのだ。

すばらしい。中央官庁を騙る怪しげな電話にも受付嬢が優しく明快に回答してくれる。欧米ならタライ回しだろう。こうした国民レベルのコミュニケーション力の高さがニッポンの創造力の源だと悟った一件であった。私がおののこどもの表現力を底上げする活動に携わることとなるきっかけの一つである。

昨年のある日、その「まるか食品株式会社」を探しにでかけた。果たしてそれは、前橋から足利に向かう国道50号線沿い、伊勢崎市、お風呂屋さんの裏側にあった。実に遠かった。「味覚のDNAがバンクにひっくり返される中、ご苦労がたえないことでしょう。」遠くから、ペヤングと書かれた看板に向かってそうつぶやいて、私はそっと東京へ引き返した。